



**人と人
ふれあいのある忠海
心をあわせて
力をあわせて！**

忠海第2地区協働の
まちづくりネットワーク
(会長 下山 ^{いくのぶ} 生修さん)

風光明媚な忠海町には、多くの伝統行事があります。地域コミュニティーや、ボランティア活動も活発です。安心・安全部会では、避難経路の他、消火栓やAED設置箇所などもわかるような防災マップを作成しました。現在、連絡網の作成と、要介護者の安全確認について話し合っています。わがまち部会では、忠海の歴史の理解と内堀公園のにぎわいづくりの2点に絞りました。月に1度、歴史講座を開催したり、内堀公園の芝生の水やりを協力して行ったりしています。磨き活かされていない人材を発掘し、団体間で協力し、忠海の素晴らしさを実感できるまちづくりを進めていきます。



**輝く おおのり
瀬戸のまち**

大乘地区協働の
まちづくりネットワーク
(会長 佐渡 清二さん)

大乘地区では、3自治会が連携してまちづくりに取り組んでいます。防犯・防災部会では、防災訓練、声かけ運動、危険箇所の調査などを行っています。環境衛生部会では、昨年「3R」をテーマとした講演会を開催したり、地域のクリーン活動に取り組んだりしています。福祉・交流部会は、高齢者などのお手伝い等を要請に応じて行う事業と、大乘小学校6年生と住民が連携して「壁画制作」を行いました。この壁画が、住民みんなにとっての大切なふるさとの風景となるよう願っています。

参加者からは、
「講演も、発表も、とても勉強になりました。若者が、故郷を想って帰ってくるような、にぎやかで明るいまちをつくらせていきたいですね。」といった感想が聞かれました。
このような地域それぞれの輝きこそが、市の輝きや個性になっていくのですね。今後のみなさんの輝きがどんな色になるか、とても楽しみです。

**変わっています！
まちが 人が 未来が！
～第5回ふるさと自慢交流大会～**

2月18日、勤労青少年ホームで、第5回ふるさと自慢交流大会が開催され、地域経営による活性化策の講演と地域活動の発表が行われました。

基調講演



まちづくりとは、
「暮らしの質を高める」
ということ

NPO法人
ひろしまNPOセンター代表理事
安藤 周治 さん

地域の困っている人を助けたり、抱えている問題をみんなで解決していくことも、まちづくりです。高齢化が進む今、お年寄りが抱えている心配事、悩み事は、共通しています。心配事や悩み事をみんなで共有して解決していくことは、非常に大切なことです。「行政主体」から、みんなが築き磨く「地域主体」のまちづくりに変化しており、自主防災など、地域が連携して、身近な所で対応できるような仕組みができています。まちづくりには、資金も必要。農家レストランなどを経営したり、特産物を販売したりするのもいいですね。自分たちで考えて、地域をより良くしていく「地域経営」こそが未来を創造するまちづくりにつながるのです。



**助け合う里
守り拓く里
輪を広げる里**

田万里町協働の
まちづくり協議会
(会長 伊藤 国臣さん)

この5年間、「安心・安全のまちづくり」と「ふるさと再発見のまちづくり」を課題としてあげ、様々な取り組みを進めてきました。自主防災部会では、初期消火訓練や炊き出し訓練など、実際に災害を想定した訓練を行いました。多数の参加があり、十分な成果が得られたと思います。文化財保全活用部会では、旧田万里小学校の校舎を活用し、300点余りの資料を収集・展示しました。また、旧山陽道の文化財の美化・保全整備も進めているところです。今後、第2次地域行動プランを策定し、地域の可能性にチャレンジしていきます。

今年、重要伝統的建造物群保存地区に選定されて30年という節目の年です。これから、竹原の輝かしい歴史の礎となった保存地区の歴史を築き、守り続けた先人達の姿、それを引き継いだ人々の思いを連載していきます。これを機会に、保存地区を通じて、先人達のメッセージを受け取ってみませんか。

時を超えた メッセージ



先人達は 私たちに 何を託したか

①製塩の歴史と先人達
問い合わせ 文化生涯学習室
☎ 22-7757

竹原の底力・誇り ここにあり

連載第1回目は、「製塩の歴史と先人達」です。

竹原の繁栄の基盤になった製塩業の歴史には、何事にも懸命に取り組み、逆境にも負けず、知恵を出し合い解決策を探る先人達の姿がありました。

試練に負けず 創意工夫を続ける

江戸時代の初め、全国で新田開発が盛んに行われました。竹原湾でも、賀茂川が運ぶ

土砂でできた干潟を利用して干拓が行われましたが(図1)、土地が低く塩気が強いため作物ができませんでした。

しかし、土地を見た播州赤穂(兵庫県)の商人から「塩田に適しているのでは」との助言を受けて、慶安3年(1650年)、潮の満ち引きを利用した入浜式塩田という画期的な方法を導入しました。この方法によって、良質な塩を産出できたので、承応元年(1652年)には、60ヘクタールの塩田が作られました。

竹原塩、天下をとる

入浜式塩田の作業は、炎天下の中での過酷なものでしたが、人々は製塩業にかけるひたむきな姿勢をくさず、良質な塩を作り続けました。

製塩業はまたたく間に主要産業となり、竹原は日本有数の塩の産地にのし上がりました。人工の川として整備された本川は、塩を運ぶ港の役割を果たしました(図2)。この港から、竹原の塩が日本全国に売られ、多くの利益を生み、

また、入浜式塩田の技術が瀬戸内海沿岸に伝わりました。塩が育んだ文教の地

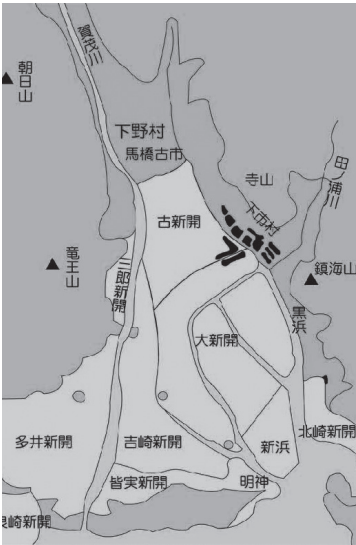
この塩田経営で財を成し、質見世(金融業)、酒造業、廻船業など幅広く事業を展開した富裕層は、学問や文化活動に力を注ぎ、竹原独自の文化を開花させました。この文化は、幕末に時代を動かした志士達に影響を与えた「日本外史」の作者「頼山陽」を世に出しました。

310年の歴史に幕を下ろす

富裕層は、大規模な宅地に本瓦葺、漆喰塗籠、竹原格子でデザインされた屋敷を構え、重厚な町並みを形成していきました。この価値が認められ、昭和57年(1982年)、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

竹原の塩づくりは、人々の努力によって主要産業となり、まちの発展に寄与してきました。しかし、先人達の数々の努力にもかかわらず、輸入塩や効率の良い技術の普及により、昭和35年(1960年)、310年の歴史に幕を下ろしました。現在の塩田跡地には江戸堀が残り、当時の様子を物語っています。

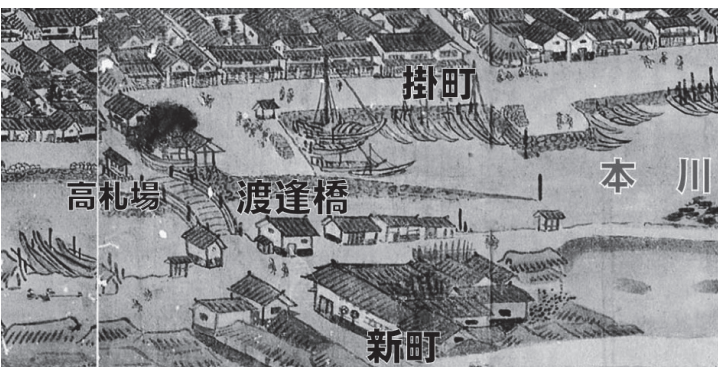
天保5年(1834年)



明応年間(1492~1501年)頃



▲図1 干拓による地形の変化



▲図2 市重要文化財紙本著色竹原絵屏風に描かれた本川(住吉橋付近)の様子